

# 地域の課題 研究者も考えます

16

## 宝を生かす計画



西澤泰彦センター長

### 見直したい 身近な地域資産

私の専門は、建築史という学問である。建物の特徴を把握し、それに基づいて建物を歴史上に位置づけている。この手法を生かして、名古屋市では、現存する歴史的建造物を「地域資産」という概念で登録していく制度の立ち上げに協力した。その経験を生かして、二〇一三年、多気町丹生地区のまちづくりについて、地元の方々と意見交換、交流をしたことがあった。

その時、私が皆さんに示したこと



①和歌山別街道の道標  
②玉石で造られた立梅用水の側壁＝いずれも多気町で



## 新たなまちづくりの一步に

は、見慣れた身の回りにあるモノをもう一度見直して、「地域資産」として再評価するということだった。

例えば、建物の基礎や庭の土留め、水路の側壁などにきれいな玉石が使われている。それらは、丹生の街並みを構成する貴重な要素にもなっている。加えて、それらは、櫛田川の中流で産出すると思われる玉石が大量に丹生に運ばれたことも示すのだが、それ自体が丹生の繁栄を示している。

街並みの中心は、伊勢と吉野や高野山を結ぶ和歌山別街道に沿っているが、街並みの中で街道は二度、直角に曲がる。その曲がり角には石の道標が建てられている。道標には、向かって右側に「左よしのこらや」、左側に「右いせさんぐら」と刻まれている。それは、旅人がその道標を見て、そこで迷わず曲がることのできる表記になっている。

丹生での経験は、身の回りのモノを地域資産として再評価することがまちづくりの第一歩であることを実感させてくれた。